日本思法伝

第26回

作・佐々木守
え・岡本颯子

（一）

カラカラと音をたてて銅鐸はころがる。

「何をするのですか」

思わず銅鐸へかけよろうとした玉櫛のえり首を、白布はぐいとつかんだ。

「母さま」

何も知らぬ清麻呂はわっと泣き出す。

白布は声をたてて笑った。

「あれが、お前たち出雲族の守り神か、あれが」

玉櫛はえり首をつかまれたまま唇をかむ。

「見ろ！　出雲族は滅びた、見ろ！」

白布の手が上がる。とたん、四方をかこんでいた能登軍団の兵士たちが、わっと銅鐸をおしつつむと、つばをはきかけ、足で蹴りつけはじめた。

「やめて！　やめて下さい！」

玉櫛は叫びつつ目をとじる。そのまぶたの裏に、静かにむくむくと海上にわき上がる白い雲がうかんだ。

ああ　出雲！

その白雲のわきたつ海を見下ろして、天にそびえた大社が崩壊してすでにいくとせ。

私の出雲！

そこへ帰る日は、もはや永久にこないのかもしれない。

にぶく、低く銅鐸は兵士たちの足の下で鳴る。玉櫛はそれを銅鐸の苦吟ときく。

銅鐸よ、許しておくれ、私もまた、あなたと同じ苦しみを我と我が身に課そうほどに。

「白布」

目をとじたまま、うめくように玉櫛はいう。

「あなたのいいなりになります。鐸をはずかしめることだけはやめて」

「やめろ！」

どなった白布の唇に冷たいほほえみが浮かぶ。

「それでいい、もともとお前はおれの許婚者であったのだ」

兵士たちの見守る中で、白布は死んだような玉櫛の唇を、思い切り吸う。

「荒れておるようじゃの」

皮肉な微笑と共にあらわれたのは阿部比羅夫である。
「兵士たちを刺激するのはよしたがいい。ここはまだ若狭の浜。みやこまでは遠いでな」
「そんなことはわかっている。しかし、ここはおれの陣屋だ お前が断りもなしに入って来ていい道理はない」
「そうかな」
「何！」
「おれはたしか蝦夷征伐の将軍であったはずだが……」
「……」
「それにもう一人、勝手に入り込んでいる奴がいるようだが」
一瞬、白布は、さっと腰の剣をぬくと、兵士たちの群をめがけて、目にもとまらぬ勢いて投げつけた。
と、闇の中に並んだ兵士のひとりが音もなく天へとんだと見えた。
「弓月！」
白布は叫んだ。
玉櫛は、思わず閉じていた目を開く。
「弓月……」
そのとき、すでに黒い影は、砂浜にころがる銅鐸のかたわらにうずくまっていた。
「父さま」
一瞬の沈黙を破ったのは清麻呂。
「玉櫛、清麻呂をたのむ」
黒い影はそういうと、銅鐸をかかえて、再び空へとんだ。
「追え！」
白布の声が闇にひびいた。
あっけにとられたように立ちすくんでいた兵士たちはあわててバラバラと弓を射かけた。
が、空の闇は動かなかった。
阿部比羅夫の笑い声がわずかに闇をゆるがしたのである。
「来い！」
屈辱を忘れようとするかのように、白布は玉櫛の手をひっぱった。
「いやです」
きっぱりと玉櫛はいう。
「鐸がなくなった今、私は、あなたにはずかしめられるいわれはありません」
「こいつ！」
いきなり白布は、力の限り玉櫛の頬をなぐった。ふっとぶように玉櫛の細いからだは砂の上にくずれた。
「母さま」
清麻呂が走りよる。
「つれていけ！」
兵士たちに命じると、白布は、倒れた玉櫛のからだの上に馬のりになって、めちゃめちゃになぐった。
「死ぬかもしれない」
そう思いつつ、玉櫛はいまは心安らかであった。あの人が、鐸を、私の出雲をかかえていった。それでいい。
だんだんうすれていく意識の中で玉櫛は遠い故郷のうたをきいた。

八雲たつ
出雲白雲
海にたつ
七重地の雲
八重天の雲

海のように大きい湖だ。
ここへくるたびに、弓月はそう思う。
そういえば、おれがはじめて銅鐸の妙なる音色をきいたのもこの湖のほとりであった。あの音に魅せられてから、弓月の人生も大きくかわっていったのであった。
あのときは、銅鐸とは何であるのかもしらなかったおれ……、それがいま、おれの腕の中に銅鐸がある。
弓月は、その銅鐸をいとしいものであるかのように撫でた。
あのとき、おれは、玉櫛や清麻呂を助けようと奴の陣屋へしのびこんだのだったが、この銅鐸を思わず抱きしめていた。それほどこいつの音色がおれの心をとらえたのか。それとも、所詮おれは人の情にうすい男なのか。
まあどちらでもいい、いや両方なのかもしれない。いずれにせよ、おれは、二度とこの銅鐸を奴らにはずかしめられぬようにしよう。
弓月は静かに歩き出した。
湖をわたる風はつめたかった。
かつて、銅鐸は、海を渡る風の中で、力の限りにあの美しい音色をひびかせていたのである。それがいまはどうだ、日本全国で人の目にふれることのできる銅鐸は、おそらく皆無といっていいだろう。
三百年前、朝鮮半島から玄海灘をこえて奴らが九州に上陸した時から、銅鐸受難の歴史はつづくのだ。
九州から東征――、その間、自由自在に馬をのりこなし、怪しい呪術信仰を持つ奴らは、出雲族の祭りの象徴である銅鐸をはずかしめつづけた。
騎馬民族が来る！　奴らがくる！　人の噂は風にのって、西から東へ流れた。銅鐸をかくせ！　銅鐸を奴らの馬のひづめからかくせ！
かくして、銅鐸は一斉に太陽の下から姿を消した。
そしていま、おれもまた――。
弓月は土を掘る。
はるか琵琶湖を見下ろす小高い丘の上に穴を掘る。お前をおれはこのまま抱きしめていきたい。しかし、おれにはまだ為さねばならぬ仕事がある。
鐸よ、おれがおれの仕事を完成するまで、ここで静かに眠れ。
弓月は穴に銅鐸を入れると、その上からパラパラと土をかけていった。
やがて、にぶく光る銅鐸を、土がすっかりおおいつくす頃、湖面をわたる風は、いつか夕方の風に変わっていた。

(三)

この前、六五五年、女帝斉明天皇は二度目の王位についていた。斉明女帝、元の皇極天皇である。中大兄に推されて孝徳天皇のあとを襲ったものの、彼女はすでに六十二歳であった。
六十二の女に何ほどのことができよう。彼女は今さらのようにわが子中大兄を恐ろしいと思った。わざと天皇位にはつかず、つねに皇太子として実権をふるおうとする。中大兄は何を考えているのか。
天皇の胸の内は晴れない。いっそのことどうして中大兄が天皇にならないのか。さもなければ、どうして、亡き孝徳の子、有間皇子を天皇にし

ないのか。

斉明は、ひとり飛鳥板蓋宮で心をいためていた。

時に中大兄三十歳、その弟の大海人は二十五歳である。

巷には中大兄の専横をそしる声もようやくおきはじめている。しかし、それをムリおしにおしとおそうとするのが中大兄のやり方であった。おれはそうしてすべて成功して来ているのだ。大化改新もまたそうであったではないか。

中大兄は斉明女帝をまつり上げると共に、天皇家の威信を天が下に知らせるため、巨大な宮殿の造営にかかった。まず、かつて推古帝の宮のあった小墾田にかわらぶきの宮殿をつくろうとして、用材の不足から失敗、つづいて皇居を飛鳥の岡本に造営。更に多武峰にたかどのをつくる工事に着手する。そのいただきまで六一九メートル、これは想像以上の難工事であった。にもかかわらず、次には、香久山の西から石上山まで溝を掘り、二百そうの舟で石上山の石をつんで岡本宮の東の山に運び、そこに巨大な石の垣を作ろうともくろむ。

溝ほりに三万人余、垣づくりに七万人余の人員を投入したが、ついに工事は完成せず、当時これは「狂心(たぶれごころ)の渠」と呼ばれた。

人心は日一日と斉明と中大兄から離れていった。

そういう飛鳥の町に孝徳の子・有間皇子が気が狂っているとのうわさが流れた。

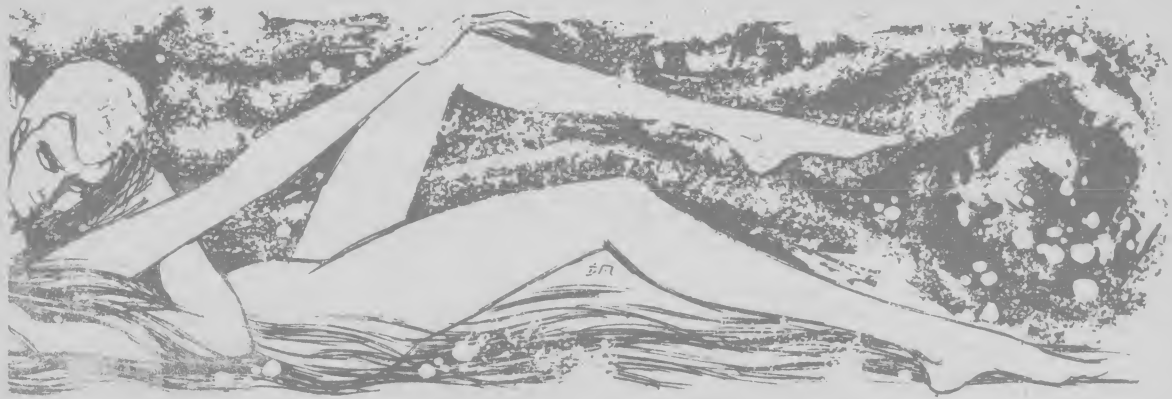
『日本書紀』にいわく、「有間皇子、性黠(さと)し、陽(いつわ?)り狂(たぶ)れて云々」と。

「黠」はわるがしこいという意味であるが、「いつわりたわぶれる」とは何か。それは皇位をはずされた皇子が、狂気のまねをしているということであろうか。有名なシェクスピアの「ハムレット」のような行ないがここにもあったというのであろうか。

飛鳥川のほとり、今日も有間皇子はすすきの間をさまよう。

時々、ふっと涙ぐむかと思えば、急にケラケラと笑い出す。それはうそかまことかわからぬが、まさに狂気以外の何ものでもなかった。

「皇子(みこ)さま」

そんな有間皇子にしだれかかるように歩いているのは額田王である。彼女はすでに立派な娘になっていた。

しかも、中大兄と大海人の二人の兄弟から共に愛されているという自信が、一そう彼女の微笑を輝くほどのものにしていた。

「皇子さま、お休みになりませぬか」

額田王は草の上に坐ると、うつろな目の有間皇子の手をひっぱる。されるままにどうとくずれた有間皇子は、そのまま額田王の若いからだにおおいかぶるような形になった。

「皇子は十八、私も……」

うたうように額田王はいう。すでに割れたえり元から、まっしろい乳房がこぼれている。

「抱いて上げる、おいで」

額田王は誰にでもするように有間皇子の背中に手をまわすと上体を横たえた。

「皇子も十八、私も……」

もう一度うたうようにいって、額田王は有間皇子の衣服をそっとぬがしていく。

「どうしたの？　皇子！」

額田王の目に怒りが走る　彼女の若い肢体をみつめながら、有間皇子の目はあいかわらずうつろなままだ。

いや、ホロホロと涙すらこぼれている。

「皇子！」

額田王はそんな有間皇子のからだをゆする。

「おい！」

その二人の上にはげしいことばが降った。そこに立っているのは大海人である。

「額田王！　お前は……」

わななく唇でうめくようにいうと大海人は有間皇子の手をひっぱって立たせた。

「有間皇子！　額田王は私の女だ、それをあなたは！」

とたん、有間皇子はケラケラと笑い出す。

「およしなさい！　気狂いのまねは！」

大海人は、フラフラと立っている有間皇子を力一杯つきとばす。

「あっ！」

声を上げたのは額田王。有間皇子のからだはザンブと飛鳥川の流れにおちて　それでももがきながら、向こう岸へはい上がる。そしてこっちをみて又笑う。

「くそっ」

かけだそうとする大海人を額田王がひきとめた。

「およしよ、あのひとほんとに気が狂ってるのよ」

「なにっ」

「だって、わたしのからだを抱いても、男にならなかったもの」

「バカ！」

平手うちがとんで額田王は草の上に倒れた。

倒れながら彼女は目をつぶった。

「さ、おいで、それとも、もう帰る？」

「額田王……」

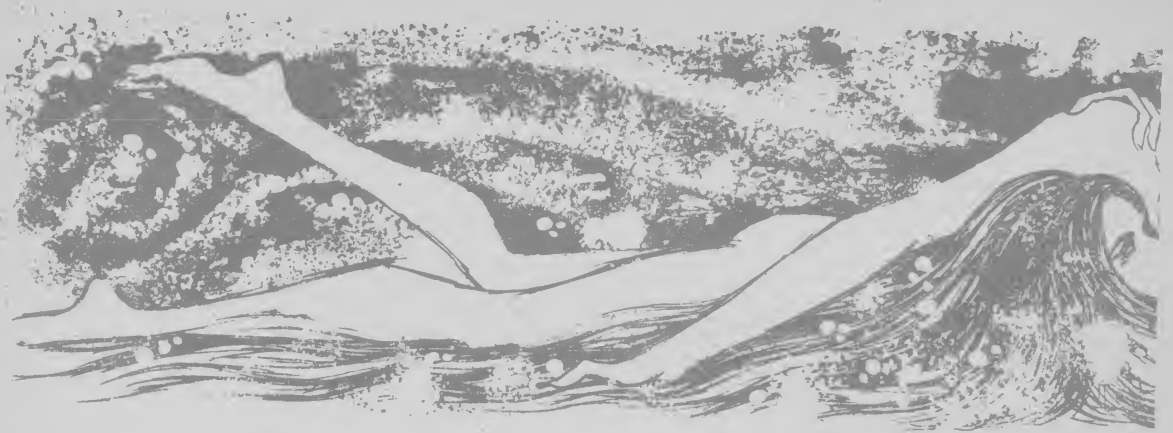
大海人の目に暗い影が走った。しかし大海人はひざまずくと、額田王を抱き上げた。

「売女！　だけど、どうしておれは、お前から離れられないのだ」

二人のからだは、草の上で一つになった。

（四）

「そうか、有間皇子は真実狂っているのか」

額田王を抱きながら、中大兄はお

かしそうにわらった。

「そう、狂ってるあの人。だってあの人、わたしのからだを抱いても男にならなかったもの」

額田王は大海人のときと同じことをいう。

「よかろう、事実有間皇子が狂っているのならば――」

中大兄は一寸考えこんですぐつづけた。

「病い治療のため、牟婁温泉(むろのゆ)へ送ろう」

牟婁温泉――現在の白浜温泉の隣りにある湯崎温泉である。

そこは太平洋の怒濤うちよせる小さな湯治場であった。

その岩と岩の間からふき出す温い湯につかって有間皇子は、はじめて本当の涙を流した。

「私の心は、あの海の波の如くさわいでいる――」

そのつぶやきは、まさにその怒濤のひびきで消されたかに思えた。

が、しかし、怒濤の中に小さな声があった。

「御心中、お察しいたします」

「誰だ!」

「しっ、おさわぎ召さるな」

湯の表が風の如くゆれて、湯の中から一人の男の顔がのぞいた。

弓月である。

「お前は、何者だ」

「忍者・弓月。中大兄に恨みを持つものです」

「中大兄に?」

「有間皇子、もし、真実、中大兄を倒す御決心あらば、お力ぞえつかまつります」

有間皇子は大声で笑った。それは自嘲的な笑いであった。

「中大兄を倒す? かりそめにも私はそのようなことを考えたことはない」

「まことでございますか。なれど、都をはじめ、畿内にすむ人々の多くは中大兄のやり方に不満を抱き、とくに中大兄憎しと考える豪族たちは数知れぬはず……」

「でもあろう、しかし、誰が私に力をかしてくれようぞ」

「蘇我赤兄!」

ずばりと弓月はいって、じっと有間皇子をみつめた。

「蘇我赤兄が?

「はい。大化改新で入鹿・蝦夷を殺された蘇我氏は、表面的には新政に対し恭順の意をあらわしていますが、しかし、同族を殺された憎しみは、一朝一夕に消えるものではありません」

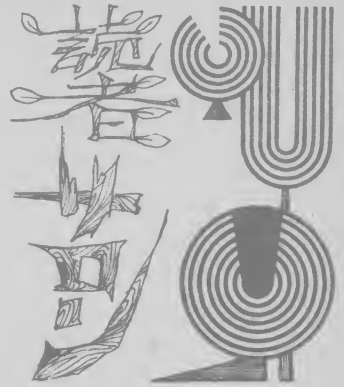
「蘇我赤兄が……」

有間皇子の目に、はじめて感情が動いた。

「皇子! 今皇子が中大兄に対して決起されれば、それに呼応する豪族の数あまたと存じます。皇子! 御決意を……」

弓月はここぞとばかりまくしたてた。有間皇子よ、立て! 中大兄を倒せ! そして次には、おれがあなたを倒す。連綿とつづく騎馬民族頭領の家系がそこで絶えたとき、わが国の空に、ふたたびあの銅鐸が、澄んだ音色でひびきわたるときがくるのだ。

弓月は、ふと、琵琶湖の見える丘の黒い土の中に眠る最後の銅鐸を思った。

(つづく)

滝田氏のとぼけた味

七里源一（滋賀・20歳）

毎月「ガロ」を読んでいる一読者として次のようなことを発言します。

最近の「ガロ」はサエなくなった。

根拠I。「カムイ伝」がいよいよ大詰に近づき白土三平はこれまで構築した世界を解体しようとする意図が見えすいており、作品として薄っぺらくなったこと。細かいことを論じるのは避けるが、正助を中心に大規模な一揆の必然性をとらえようとしていることが読みとれすぎるという点に集約する。

根拠II。水木しげるの「鬼太郎夜話」は『コム』9月号の紹介によって筋がわかっているだけに新しいモチーフの読みとれない今度の作品はつまらない。

根拠III。永島慎二の素材主義に問題がある。「禁じられた遊び」は映画そのままではないか。「かかしがきいたかえるのはなし」はよかっただけに惜しまれる。

根拠IV。以上のことを新人がカバーすべきなのにその点が充分満たされてない。新人の問題意識と作品との関係を考えれば、表現力に多くの問題が残されている。例えば、つりたくにこのマンガの結末。

かろうじて「ガロ」の堕落を救っているのは、滝田ゆうのとぼけた味のマンガとつげ義春の不条理な感覚をテーマにした諸作品。だが、12月号の「西部田村事件」はサエなかった。精神病患者の脱走をもっと不条理なものとしてとらえればよかったと思う。

「ガロ」の虜となって

福嶋清（北海道）

「ガロ」を昨年の八月号からとり始めた一読者。今迄読んでいた漫画と全く異質のものとして新鮮さを感じて、今では「ガロ」のとりことなっている今日この頃、特に興味を持った作家は、つげ義春である。ハッキリ理解出来なくとも何かことばに表現出来ないボヤッとした抽象的な何かを感じることが出来るのである。一見キザなせりふにユーモア的笑いを含み、自然と人間の交錯にこの作家の特異さを感じる。12月号の『西部田村事件』が氏の作風を最も象徴し、今迄の中では一番の傑作だと思っている。

他の作品で気にいっているのは、ほのぼのとした作風の、永島慎二の「かかしがきいたかえるのはなし」、最後の頁で笑いをこらえる、つりたくにこの「六の宮姫子の悲劇」などである。少しひねくれた感じでキザな作家(?)の水木しげるの短編もの「なまけ武蔵」「日本のカミサマたち」は違った面白さを感じた。「鬼太郎夜話」をとりやめてこの様なものばかり書いて欲しい。滝田ゆうの漫画は良く分らない。絵が面白いのでそれを眺めている。11月号の「くちおしい」の猫の顔は良かった。

呪縛への痛烈な問いかけ

中野裕子（埼玉・21歳）

最近の「ガロ」へ批判や不満が集中してきているようです。「ストーリー」が無いということ（つまり難解だということになるのでしょうが）、「人間性」が感じられないということが、その主な原因であるようです。

私はそうした批判に根本的に反対です。私は逆に最近の「ガロ」はおもしろくなってきたと思うからで、それを単に私個人の好みの違いだとは言い切れない問題があると思うのです。

ひどく大ざっぱな言い方をしてしまえば、「大衆社会状況」とか「確固としたロマンチシズムの不在」とか「人間性の崩壊」とか言われる現代状況にあって、「ストーリーのある」、単純明快で、ドラマティックで、ヒューマニスティックな漫画はもう描けない時点にあると思うのです。以前連載されていた「大空と雑草の詩」が作者の主観的意図に拘わらず私たちに異和感でシラジラしさを感じさせたのは、やはり作者の現実認識の甘さと乏しさだったと思う。

白土三平氏は、直接現代を舞台にしては、「カムイ伝」という一大ドラマを描くことはできないし、水木しげる氏の作品に私たちがひかれるのは皮肉にも、その非人間性にでしょう。「ヒューマニズム」なんて、ねずみ男はきっと笑うにちがいありません。現代の漫画は、もうおもしろおかしいおハナシ、あるいは観念の絵ときであることから脱けでるべきであると思う。

私は、佐々木マキ氏「天国で見る夢」は、まさにストーリーがないということに私は真実を感じ、高橋氏（1月号・読者サロン）の言葉をサカサに借りれば、諷刺あり、哲学あり、詩情あり、で興味深かった。抽象された精神の運動と豊かなイメージの湧出をマンガという表現のカタチに心にくいまで生かしきった大胆な試みだと思う。

そして「漫画」＝おもしろい絵、「劇画」＝ストーリーのある絵、という呪縛へのひとつの痛烈な問いかけにもなっていると思う。佐々木マキ氏は、永島慎二氏とならんで技術的にはしっかりした洗練された美しい絵の描ける人だと思う。

勝又進氏については、私は、今のままでは才能のすりへらしでしかないと思う。絵のまずさ（デッサン力の弱さ）はおくとしても、勝又氏のマンガの面白味は、《既成観念の転覆＝ひっくりかえし》にあ

るのだが、その転覆されるべき既成観念が現状況とあまりにくいちがい、一時代前の常識、既成観念であって、すでに死んでしまっているので、それをひっくり返してみたところで少しもおかしみがわいてこないのだ。すでにひっくり返されてしまっていて、今ではそれ自体が「既成観念」になっているのだから。

具体的に言うと、勝又氏は「女性はしとやかなもの」「坊主は高尚なもの」「学生は学究的なもの」等々の既成観念をひっくり返し、ひやかし、笑うのだけれど、しかしいまどき誰が本気でそんな「常識」を信じているだろうか。だから私には「一服の清涼剤の爽快さ」（1月号・吉野氏）なんぞミジンも残らず、常に状況にとり残される、きまじめな青くさいインテリ青年への焦だちだけが残るのです。

つげ義春氏には不思議な魅力を感じます。水木しげる氏とは似て非なる〈詩〉、あるいは「日本的抒情性」とでも言いましょうか……。氏の世界には美しく優しく何か人間存在にかかわるおそろしさのようなものがひそんでいるようです。人間のうわずみの部分も、意識されない不可解なドロッとした部分も、さりげなく、しかし執拗に描かれているのに驚きます。つげさん、あなた、いったい何者なのでしょう。あなたは作品のかなたに無限に小さく消えていってしまいます。

滝田ゆう氏の面白さも説明しにくいのですが、とにかく面白い。安っぽいヒューマニズムなんて、これっぽっちも無いのに、奇妙にほのぼのとしたもの、人間へのいとしさがわいてくるから不思議です。そして、氏のセリフの楽しさは格別で、一月号の「浪曲師…」ではその良さが最大限生かされた傑作だと思います。「長い道」の九州弁と内容とのからみあいから生まれる面白さも好きです。

「難解だ」「ナンセンスだ」という批判は本質的な批判にはなりません。読者は単に享受者として、「ガロ」に無いものねだりするのではなくて、現在の「ガロ」が抱えている問題を自分自身の内部の問題としてとらえ返すべきだと思う。

商業主義に毒されずに

福野とし子（大阪）

読者諸兄姉が〝サロン〟で述べられているように、近頃の「ガロ」にはガッカリすることが多い。「ガロ」をとりだしてまだ一年足らずですが、それでも以前より軽く、他人に是非とも一読すべきだとすすめられなくなった。

11月号の新人はどれもとりたてるものもなく、新人にガッカリするのは「ガロ」の将来に不安を感じます。新人は次の時代のマンガ界を担わなくてはならないハズ。それが既成漫画と似かよった作品を描くなどとは！既成概念を打破して商業主義に毒されない新人漫画の発掘を望む。

勝又進氏へ。〝時事評論〟も良いでしょうが、同じことのくり返しに見えます。氏自身の漫画を見せて下さい。

滝田ゆう氏の「長い道」は良かった。九州弁と無表情な顔のお内儀がピッタリ。最後の〝オチ〟は落語的。夜逃げをする時のお内儀の顔がなんともいえない。

永島慎二氏へ。「小さな世界」は「禁じられた遊び」と同テーマ。「禁じられた遊び」のときもそうであったように私はこういうたぐいの漫画は氏の本当の持ち味がでてこないと思います。たしかに現代の戦争である交通事故を主題に子どものもつ純真さと、同時にその裏の残酷さは、テーマとしてすばらしいかもしれない。しかし、氏にはそんなことよりも「フーテン」のような作品を描いて欲しい。氏を青年マンガ専門に縛りつけたくはないけれど、永島慎二という人には一番厳しい時代の人間をより残酷に描いて欲しい。「かかしが聞いたかえるのはなし」のような……。

へそのない漫画を嘆く

横井睦（京都）

読者のみなさん。私は、諸君が正しい批評眼を持っておられることに敬意を表すると同時に、感謝の意を表する者です。というのは、私も創刊以来「ガロ」を愛読しているのですが、最近の掲載分には理解し難いものが多く、苦しんでおりました。最近やっと、読者サロンの声に教えられたのですが、なるほど、内容が著しく低下しています。

考えてみれば、奇を衒う作家の多くは、あまりにも無責任すぎるのです。作家自身が主題（へそ）を持っていないのですね。だから作品が渾沌としたものになってしまう。そして、ある作家はそれを「幽玄」と感違いして自己満足に陥るし、ある作家は、読者が各自で最も相応しい主題を見出してその作品を高く評価してくれるだろうという甘い了見をおこす。このような作品に、いままでむだな努力を重ねてきた自分がなさけなくなります。「無」から「有」が生じないのは、普遍の真理ではありませんか。

いや、これはいいすぎかも知れません。作家諸子に失礼でもありましょう。しかし、こういうことは言えると思うのです。すなわち子供の粘土細工のように、作っていく過程において、しだいに主題が髣髴としてくるのだと。これでは読者にとって、はなはだ迷惑です。陳腐に甘んずる三文絵かきならともかく、新しい姿勢をもって漫画の地位を変革しようとする芸術家がこれでは困ります。いやしくも一つの作品を書くにあたっては、大部の小説を書き始めるときと同様の計画性が欲しいもの、とぼけた凸凹顔の一つにしても、主題の流れ下る溝中にあって欲しいものです。作家自身が目的意識を持って、その主題の表現に、文字の欠点を補正した画を手段とするのが、漫画のあるべき形態ではないでしょうか。

最近の傾向を憂えるあまり、一つの極論となってしまいましたが……。

新人作家募集!!

「ガロ」編集部では、優秀な新人作家を募集しています。どしどしご応募下さい。

——〈作品投稿規定〉——

① 題材・テーマ・モチーフ・枚数自由。
② 作品の独創性を第一とする。
③ なるべくB3判の紙に、必ずタテ27.3cmヨコ18.2cmに書くこと。ゴマ取り自由。
④ 墨汁または製図用黒インキを使用し、ウス墨やウス色はつけない。
⑤ セリフなどの文字は、エンピツで一字一字正しく読みやすく書くこと。
⑥ 締切日は設けず、到着次第「ガロ」編集部において審査する。
⑦ 入選作品は「ガロ」誌上に掲載し、原稿料を支払う。入選作品の版権は、青林堂に帰属する。
⑧ 応募原稿は一切返却しない。
⑨ 送り先は、東京都神田神保町1の55 株式会社青林堂「ガロ」編集部